

# 社会学ジャーナル KAKEN22H00904

第1号

2023年3月

# 社会学ジャーナル Kaken22H00904

## 第1号

### 目次

【文献紹介】テレビにおける歴史表象に関する諸文献 —英米圏の研究を中心に(1)—	小川 伸彦	1
---	-------	---

## 【文献紹介】

### テレビにおける歴史表象に関する諸文献

#### —英米圏の研究を中心に（1）—

小川 伸彦

現代において"過去"はいかに存在しているのか。"過去"の存在様態はそれぞれの社会の集合意識 (E.デュルケーム) や集合表象のあり方とどのように関わっているのか。これが本稿の根底をなす問題関心である。

"過去"の存在様態というテーマがカバーすべき範囲は広く、具体的な事象として思い浮かびやすいのは文化財やモニュメント、アーカイブなどであろう。実際、筆者は〈文化遺産の社会学〉というべき分野に関心をいだき、研究をすすめてきた (小川 2020 など)。

それらがもっぱら制度的枠の中で進行する社会現象であるとするなら、メディアやポピュラーカルチャーといった、よりゆるやかな場における過去表象はどのようになっているのだろうか。すでに海外には、現代人の過去観についてや、文化やメディアにおける過去のありかたについての研究の蓄積がかなりある。そこで本稿では海外の諸研究を紹介し (cf 小川 2022)、メディアの中の過去を研究する際にどのような論点がありうるかについての知見を得る端緒としたい。

なお、歴史にかかわるメディアやポピュラーカルチャーといっても、記録文学や小説、映画・テレビやゲームなど関係するジャンルは多岐に渡る。そこで以下では、社会のなかの広い層の人々が日常的に接し、その意識や表象に影響したりされたりする度合いが高いと推察されるメディアとしてテレビ番組に絞り、英米圏を中心に先行研究を紹介する。その紹介は各論考の実質的な内容に大きく立ち入るのではなく、なにが論じられているのかというテーマ設定のアウトラインを示す形で進めていく。なお、研究手法を学び取ることも重要なので、方法論的な特徴についても適宜ふれたい。

取り上げる書目は、各文献で言及されているものをたどるという方法で順次範囲を広げてリストアップしていったが、もちろん網羅的なものではない。書き手は、社会学者よりもむしろ文化研究やメディア・スタディーズ、文化史などの分野の研究者が多く、さらには番組制作当事者の寄稿などもふくまれている。テレビ論が映画論などとミックスされた編著なども取り上げるが、映画のみをテーマとした文献は取り上げていない。

以下における諸文献の配列は、研究のあゆみを辿るという観点から刊行年の昇順とし、見出し部分にタイトルの試訳を付した。引用は、各紹介の当該文献が出所である場合はページ数だけを示す。なお、以下で紹介する McArthur(1978)のように現時点で入手・閲覧できな

かった場合でも、重要なものに関しては書誌情報を掲げ、版元の紹介文や他の文献での言及・書評などに依りつつ間接的に紹介することがある。

■1977「歴史、および記憶の生産」&「歴史/制作（生産）/記憶」■Tribe, Keith, 1977, "History and the Production of Memories" *Screen* 18(4): 9-22./Nash, Mark and Steve Neale, 1977, "Film:'History/Production/Memory'," *Screen* 18(4): 77-91.

Screen 誌の同じ号に掲載されたこの2本は、どちらも1977年のエジンバラ国際映画祭において開催された特別イベント「History/Production/Memory〔歴史/制作（生産）/記憶〕」に関わるものである。

このうちTribe(1977)は、イベント内での講演原稿を改稿したものである。ミシェル・フーコーのポピュラーメモリー（*mémoire populaire*）概念（Foucault 1974:7）などに言及しながら映画における歴史について論じつつ、テレビにおける歴史（番組）についても次のような興味深い言及がある。

しかし、この歴史は、「事実」が正しいという理由ではなく、イメージが正しく見えるという理由で、視聴者によって<真実>として認識される。「それがそうだった」という認識効果は、プロットの歴史性ではなく、イメージの操作の産物である。（p.16）

第一次世界大戦からその戦後を舞台としたイギリスBBCの番組『Days of Hope』（1975年制作）を例示した上で分析であるが、なにかが画面に登場するとき、それが歴史的事実だからきちんと提示されているというより、細部まで丁寧に描かれていることによって歴史的な真実らしさが立ち上がるという逆転現象の指摘といえるだろう。またドラマの内容については、「歴史のイメージを使用して現代の政治的議論が展開」（p.18）される可能性にも触れている。

Nashら（1977）のほうも、映画祭の特別イベント「History/Production/Memory」を振り返って紹介したものであり、歴史映画論がメインだが、テレビに関しては上のTribe(1977)とは異なる視点で『Days of Hope』に触れている箇所が興味深い。Nashらによればこのような近過去の歴史番組は視聴者のなかにあるアイデンティティを生み出すが、それは個々人それぞれとしてではなく、あるclass（階級）のアイデンティティこそが生成されるという（p.84）。番組の舞台となる社会がどの程度まで階級化されているかにもよるだろうが、歴史番組が有する影響力にかかわる視点として留意しておきたい。

なおNashらは文章の冒頭で、“映画と歴史”を論ずる場合のテーマ設定の類型を、<映画の歴史/映画の中の歴史/歴史の中の映画（'history of cinema', 'history in cinema', and 'cinema in history'）>とクリアに3つ提示している（p.77）。テレビと歴史というアリーナに引き寄せれば、<テレビの歴史/テレビの中の歴史/歴史の中のテレビ>となる。本文献レビューはもっぱら2番めのものを取り上げることになるが、他の2者もおそらく無関係ではないだろう。

■ 1978 『テレビと歴史』 / McArthur, C., 1978, *Television and History*, British Film Institute.

70年代にでたこの文献(未見)は、後続する諸研究でも時折引き合いにだされる。

たとえば Gray&Bell(2013)では、「テレビにおける歴史の問題性に注目した最も初期の学者の1人」として言及され、「短めのモノグラフ」である本書が、スチュアート・ホールの理論枠組みを用いていることにも触れている。なお著者の Colin McArthur は、1978年当時は British Film Institute にいたようだが (<https://www.encyclopedia.com/arts/educational-magazines/mcarthur-colin-1934>)、他の著書の紹介欄などによると、その後フリーとなり、スコットランド文化やハリウッド映画、英国のテレビなどに関する著作がある。

■ 1981 「歴史とテレビ」 ■ Barrowclough, Susan and Raphael Samuel, 1981, "HISTORY AND TELEVISION Editorial Introduction", *History Workshop Journal*, 12(1):172-176.

英国の歴史学系のジャーナルに掲載された2名の編集者による文章であり、そのうちの一人は記憶論で名高い Raphael Samuel である。短いものだが、テレビの歴史番組を論じるうえでのポイントが目配りよくおさえられている。

まず研究対象についてであるが、「どう考えても、ほとんどの人は歴史の本を読まない」(p.172)という冒頭の一文が印象的だ。人々が日常において歴史に出会うのは書物を通してではなく、「童謡、人形、おもちゃから、文学、写真、映画」(同)においてであり、さらに「テレビ」だというわけだ。対象としうる番組種別としては、歴史的ドキュメンタリー・文学もの(ex.『高慢と偏見』)・歴史ドラマ(costume drama)・バラエティショー・コメディシリーズ・探偵ドラマ・子供向け番組などが列挙され(p.173)、さらに、宗教・人類学・科学・旅行・芸術に関する番組においても「何らかの歴史的視点」(同)が盛り込まれていることや、CMにも「牧歌的またはノスタルジック」な設定が少なくないことが指摘されている。実際に研究を進める上でも参考になる目配りである。

次に研究の意義であるが、とにかく上記のような「私たちの歴史意識に対するこの雑然とした影響の洪水」(同)を真剣に検討することが望まれてきたとされており、1977年のエディンバラ映画祭での特別イベントなど、先行の取組への言及もある。さらに番組の内容やつくりにも踏み込んでおり、テレビが放送する歴史番組の一般的な特徴として、i 明確な始まり・中間・終わりのある物語構造が採用され視聴者は受動的になること、ii 個人とその家族が強調された描かれ方が多いこと、iii 明瞭な時代区分のもとで歴史が統合的に提示され矛盾や不協和音が覆い隠されがちであること、iv 可視化されない事柄は避けられがちであること、v たとえアーカイブ映像が示されていてもそれは「ある真実」を表しているにすぎないこと、などが指摘されている(pp.173-5。なお列挙は筆者〔小川〕によるまとめであり、整理の目安に用いたローマ数字は原文にはない。以下同)。ただしこのような辛口の視点だけでなく、「伝統的な歴史的情報源の不公平を是正し、声を上げられなかった人々に権利を与える可能性を秘めている」(p.175)といったポジティブな側面にも目が向けられている。

さらに方法論についても書かれており、i 歴史の書籍を論じるときのようなスタンスではなくテレビ番組ならではの制作の諸条件などにも目配りして分析すべきであること、ii 番組を単体で分析するのではなく前後にあるどんな番組や CM を視聴者は眼にしたのかといったフローの観点 (Williams 1974) が重要であることを指摘している。

なおこの文章の標題に「Editorial Introduction」と付されているのは、この号が刊行された年の 12 月に <History Workshop Journal London Seminar TELEVISION AND HISTORY> というセミナーの開催が企画されており、その参加案内と趣旨説明を兼ねていたからだと思う。

■1992『過去をフレームに入れる：ドイツにおける映画とテレビのヒストリオグラフィ』  
/Murray, B. and C. Wickham (eds.), 1992, *Framing the past : the historiography of German cinema and television*, Southern Illinois University Press.

全 11 章からなる共編著である。「製作過程の歴史：ワイマール映画と国民的アイデンティティ」(1 章) といった映画に関する分析が大半を占め、テレビを取り上げているのは、「歴史としてのテレビ：ドイツのテレビ放送の表現、1935-1944」(6 章) と「記憶の処分：西ドイツのテレビでのファシズムとホロコースト」(8 章) あたりにとどまる。

書名にある <ヒストリオグラフィ> という概念については、序章の注においてつぎのような説明がなされている (pp.35-6)。

このエッセイでは、ヒストリオグラフィという概念に複数の意味合いを込めている。(中略) ヒストリオグラフィは、映画・テレビ・歴史の間にありうる多様な交差 (intersection) を明確化する。そこに含まれるのは、映画とテレビの歴史を語ること、映画とテレビが歴史について語ること、そして、映画とテレビが歴史の展開そのものに参加することなどである。

なかなか示唆的な整理である。すでに紹介した Nash ら (1977) の 3 類型とも響き合うものであるが、この多層性にこそ <メディアと歴史> を論じることの複雑さが反映していると言えるだろう。繰り返しになるが、筆者 (小川) による本稿は、「映画とテレビが歴史について語ること」、つまり、(フィクションをふくめた) "歴史" をメディアがいかに描いてきた／いるかに焦点をあてて文献をピックアップしている。しかし確かにここで触れられているように、メディアそのものの歴史 (いわゆるメディア史) があり、さらにメディアは、歴史そのものが作られていく過程におけるプレイヤーとしても重要な役割を担っているというわけだ。

なおこの序章の冒頭 (p.1) には、そもそも「歴史」をいかに捉えるかという認識枠組みにかかわる以下のような引用が、箴言のように掲げられている。

歴史 (中略) とは、過去そのものでもなければ、過去を明るみに出すひとつの言説でもな

い。むしろそれは、そのなかで過去が構築されるような一連の言説群なのである。(Nash & Neale 1977: 77)

過去を一貫性あるものとして固定や確保、またはピン留めすることは、過去のためではなく、現在のために試みられる。そのような表象は、主体としての自己を制御や支配することにおいて個々人は無力であると認めざるを得ないことに伴う脅迫的な不安を、追い払ってくれるように見えるのだ。(Staiger 1989: 399)

構築主義的・現在主義的でありかつ、精神分析的ともいえる歴史認識が提示されている。ちなみにひとつめのほうは上で紹介した Nash ら (1977) が「ひとつのポレミカルな主張」として示していたものだが、ここではひとつの真理であるかのように掲げられている。

ただし、さまざまな執筆者による共著である本書の各章がどれも同じ立場に依っているわけではない。この点については本書への書評のひとつ (Culbert 1995) も指摘するところである。それどころかその書評では、上記の構築主義的言明について、「行き過ぎたジャーゴン (overwrought jargon) だ」という強い表現を用いて、序章を書いた編者の Murray を批判している (Culbert 1995: 639)。

歴史とは何か、について一般的な対立軸がここには垣間見えるわけだが、メディアが描く歴史という狭いテーマにおいても、通奏低音的に同じ構図が繰り返されていることになる。すなわち、メディアは既存の事実として存在する歴史を正しく (もしくは歪めて) なぞることしかできないのか、それともメディアは、歴史を描くことによって歴史をいままさに作り出しているのか、という解釈上の対立図式がやはりあるのだ。

■ 1996 「テレビにおける歴史：ひとつの成長産業」 / Toplin, R. B., 1996, "History on Television: A Growing Industry," *The Journal of American History*, 83(3):1109-1112

著者である Robert Brent Toplin は、*Oliver Stone's USA: Film, History, and Controversy* (2000)、*Reel History: In Defense of Hollywood*, (2002) や *Michael Moore's "Fahrenheit 9/11"* (2006) などの著作があるメディア史 (特に映画) や文化史の研究者であり、歴史番組のコメンテーターでもある人物だ (AMERICAN HISTORIAN Organizational のウェブサイトにおける紹介による <https://www.oah.org/lectures/lecturers/view/981/robert-brent-toplin/>)

The Journal of American History 誌に寄稿されたこの文献では、米国のテレビ放送において、歴史ものの番組が置かれてきた状況のアウトラインがまず前半で描かれる。制作予算が枯渇し、歴史ドキュメンタリーが、より人気のあるコメディ・犯罪ドラマ・スポーツに太刀打ちできなかった 80 年代や、さらに遡った 60 年代の様子。翻って 1990 年代には、TV シリーズの *The Civil War* (1990) の大成功が歴史番組の急増を引き起こしたこと。また、ケーブルテレビの登場が、家庭の受像機 (つまりテレビ) に歴史を持ち込む新たな機会となったことなどが、コンパクトに、かつリアルに記述されており大変参考

になる。この文章に「ひとつの成長産業」という副題が付されているのは、これが書かれた 90 年代半ばまでに The History Channel などの有料チャンネルで「歴史エンターテイメントの豊富な選択肢 (abundant choices in history entertainment)」が提供され始めたり、公共放送サービスである PBS (Public Broadcasting Service) の The American Experience (<https://www.pbs.org/wgbh/americanexperience/>) というシリーズが好調であることなどに照らしたものであろう。

さらに後半では歴史番組の教育上の位置づけについての見解が次のように示されている (p.1111)。

つまり、まず内容的には、「よく研究された PBS やケーブルテレビの歴史番組でさえ、教室での視覚的な指導を求めている教師や、博物館や公共の場所でのプレゼンテーションの内容を高めたい歴史家にとって、単純な救済策としては機能しない。映画は多くの場合、教育ツールとして不十分である」と辛口の評価が下される。その理由としては、「多くの番組や作品が人物に焦点を当て、ほとんどすべての歴史的問題を特定の個人の闘争の観点から扱って」いて「幅広い非個人的な力」や「出来事の背後にある複数の複雑な原因」に目を向けていないことや、「軍事史を好んでおり、戦争中の男性に関する数多くの番組を特集」しているが、「対照的に、社会史・経済史・知の歴史はあまり注目されていない」ことなどが指摘されている。

しかし Toplin は論をここにとどめていない。結論部分では、「多くの場合、それらは歴史の生徒に感情的な引っ掛かり/きっかけ (an emotion hook) を提供し、あるテーマに対する個人的な興味を刺激し、図書館や本屋を訪れるよう動機づける」(同上) と述べて、歴史番組の間接的な効果を、実例を示しつつ指摘しているのだ。

このように Toplin のこの寄稿は全体としてバランスのよいものであり、すでに紹介した Barrowclough&Samuel (1981) などでのさまざまな指摘とともに、<メディアのなかの歴史>を考える場合に大変示唆的であるといえよう。

(次号につづく)

## 文献

Barrowclough, Susan and Raphael Samuel, 1981, "HISTORY AND TELEVISION Editorial Introduction," *History Workshop Journal*, 12(1):172-176.

Culbert, David 1995, "Book Review: Framing the past: The historiography of german cinema and television," *History of European Ideas*, 21(4):639.

Gray, Ann and Erin Bell, 2013, *History on Television* Routledge.

Foucault, Michel, 1974, "entretien avec Pascal Bonitzer et Serge Toubiana, « Anti-Rétro », " *Cahiers du cinéma*, 251-252(juillet-août): 5-18.

McArthur, Colin, 1978, *Television and History*, British Film Institute.

Murray, Bruce and Christopher Wickham eds., 1992, *Framing the past : the historiography of German cinema and television*, Southern Illinois University Press.

Nash, Mark and Steve Neale, 1977 "Film:'History/Production/Memory'," *Screen* 18(4): 77-

91.

小川伸彦、2020、「制度の作用」木村至聖・森久聡編『社会学で読み解く文化遺産：新しい研究の視点とフィールド』新曜社、11-17.

——、2022、ウェブ記事「いまここにある過去」（科学研究費 基盤研究 B [22H00904] <「集合意識」から「情動の社会学」へ—デュルケーム社会学の現代的展開>ウェブサイト <https://avecdurkheim.com/reading.html> 2022.11 掲載）

Staiger, Janet , 1989, "Securing the Fictional Narrative as a Tale of the Historical Real," *South Atlantic Quarterly* 88 (2): 393–413.

Toplin, Robert Brent., 1996, "History on Television: A Growing Industry," *The Journal of American History*, 83(3):1109-1112.

Tribe, Keith, 1977, "History and the Production of Memories," *Screen* 18(4): 9-22.

Williams, Raymond, 1974, *Television, Technology and Cultural Form*, Fontana. (木村茂雄・山田雄三訳、2020、『テレビジョン——テクノロジーと文化の形成』ミネルヴァ書房.)

(おがわ のぶひこ 奈良女子大学文学部教授)

社会学ジャーナル KAKEN22H00904

第1号

2023年3月31日発行

発行者 社会学ジャーナル KAKEN22H00904 編集委員会

代表者 小川 伸彦

住 所 〒630-8506 奈良市北魚屋西町

奈良女子大学文学部人文社会学科 小川研究室内

\* 本誌は下記の科研費研究に関連する成果等を発表する媒体のひとつです。

「集合意識」から「情動の社会学」へーデュルケーム社会学の現代的展開

科学研究費 基盤研究 B (22H00904) 2022年度～2025年度

ウェブサイト <https://avecdurkheim.com/>